

第9章 内発的動機づけを高める自己評価の試み

脇田 里子・越智 洋司

内発的動機づけを高める自己評価の試み

Self-Evaluation for Enhancing Intrinsic Motivation

脇 田 里 子・越 智 洋 司

Riko Wakita · Youji Ochi

福井大学 留学生センター・近畿大学 理工学部

International Student Center, Fukui University ·

School of Science and Engineering, Kinki University

概要：フレキシブル・ラーニングの点から、大学授業における主体的学習の支援を課題にする。学生の主体的学習を支援する方法として、学生がもっとも関心をもつ成績評価に着目する。学生の成績評価に対する動機づけを高めることで、主体的学習を支援することを目的とする。成績評価を内発的動機づけと捉え、自己評価を試みる。具体的には、毎時の授業終了時に、学生が自己評価による学習把握シートを記入することにより、学習状況を把握し、次に何を学習すべきかを考えさせるといった主体的学習を支援する。

1. はじめに

近年、学生の主体的な学習を支援する授業として、学生参加型授業、協調学習、フレキシブル・ラーニングなどが提唱されている。本稿はフレキシブル・ラーニングの点から、大学授業における主体的学習の支援を課題にする。

学生の主体的学習を支援する方法として、学生がもっとも関心をもつ成績評価に着目する。学生の成績評価に対する動機づけを高めることにより、主体的学習を支援することを目的とする。目的を達成する方法として、成績評価を心理学における内発的動機づけ理論に従い、自己評価を試みる。内発的動機づけ理論の中で、とりわけ、クルグルanski (Kruglanski, 1978) が提唱した内生的帰属説を取り上げる。内発的動機づけ理論の詳細は、第2章で述べる。第3章では、内発的動機づけ理論と成績評価の関係を論じる。

目的を達成するための手続きとして、第4章で、内発的動機づけを高める自己評価の手続きを述べる。学生が学習状況を自己評価するために、教員は、事前に、成績評価の評価項目、基準、過程を学生に具体的に提示する必要がある。それは成績評価過程の透明性を高めることでもある。毎時の授業終了時に、学生は自己評価による学習把握シートを記入する。それにより、学生に現在の学習状況を把握させ、次に何を学習すべきかを考えさせるといった方法をとることにより、主体的な学習を支援する。

目的達成のための具体的な方法として、第5章で、授業における自己評価例をあげる。最後に、第6章で期待される結果とまとめを行う。

2. 内発的動機づけ^{*1}

心理学の達成動機理論の中に、「外発的動機づけ」と「内発的動機づけ」という考え方がある。古典的な解釈では、マレー (Murray, 1964) が外発的動機づけを「活動と報酬の間に固有の結びつきがなく、報酬を得るために活動が遂行されること」、内発的動機づけを「その活動自体から得られる快や満足のために活動が遂行される」と定義している。

そして、外発的動機づけと内発的動機づけの関係に関して、2つの対照的な効果が指摘されている。「アンダーマイニング (undermining) 効果」と「エンハンシング (enhancing) 効果」である。アンダーマイニング効果は、「外的報酬を予期して課題に従事することがその課題に対する後の内発的動機づけを低下させること」として、古典的な学習理論では説明できない、一見常識に反する現象とされている。一方、エンハンシング (enhancing) 効果は、「報酬などの外発的誘因が内発的動機づけを高めること」である。

このアンダーマイニング効果とエンハンシング効果の解釈に関して、クルグランスキ (Kruglanski, 1978) の認知理論による「内生的-外生的帰属説」(endogenous - exogenous attribution) では、行為に関する手段性、および、目的性の認知に焦点をあてた考え方で、次のように解釈している。「内生的帰属とは、行為の理由が行為自身に帰属されることを指し、その際、行為それ自体が目的であると知覚されるとともに正の感情を感知させる。一方、外生的帰属とは、行為がある目的を達成する手段として知覚されることを指し、負の感情を感知させる。この説によれば、アンダーマイニング効果は外生的帰属が促進されることによって起こる。」(宮本他：1995) つまり、エンハンシング効果は、内生的帰属が促進されることにより起こり、自己目的性の認知は正の感情を喚起させ、後の内発的動機づけを高めると予測される。

エンハンシング効果を得るためには、内生的帰属を促進すればよいことになる。次章にて、成績評価を外発的誘因である報酬と捉え、成績評価を内生的帰属説の中で解釈する。

3. 成績評価と内発的動機づけ

一般的に、授業における成績評価は学生にとって報酬と考えられる。授業で学生がよい成績評価を得るための学習行為をクルグランスキの「内生的-外生的帰属説」の枠組みで解釈する。まず、外生的帰属説で解釈する。学生がよい成績評価(報酬、外的誘因)を得るためだけに学習をしているのであれば、その学習行為はよい成績を得るという目的のための手段として知覚され、その行為には負の感情が伴う。その結果、外的誘因が存在しなくなった際には、その行為に自発的に従事することはなくなる。つまり、成績評価(報酬)を得たところで、その学習行為は止まり、内発的動機づけが低下する。

次に、内生的帰属説で解釈する。学習行為と学習行為自体が目的であると認知すること、すなわち、自己目的性の認知は正の感情を喚起させ、後の内発的動機づけを高めると予測される。

*1 第2章の内発的動機づけの説明に関しては、宮本他(1995)に負っている。従って、マレー(Murray, 1964)クルグランスキ(Kruglanski, 1978)の理論説明は、宮本他(1995)からの引用である。

この場合、成績評価（報酬）に関係なく、自律的に学習は継続される。

では、よい成績評価を得るための学習行為を外生的帰属説ではなく、内生的帰属説として認知するにはどうしたらよいか。外生的帰属説と内生的帰属説の違いは、同じ行為を手段性と認知するか、目的性と認知するかにある。そして、その違いを正の感情と捉えるか、負の感情と捉えるかにある。

つまり、学生がよい成績を得るために、学習する行為を、学習させられていると感じさせず、学習自体が目的であるように誘導すればよい。よい成績評価を得るための学習行為は、一見すると、外的動機づけに思われる行為である。それを内的動機づけに転化させることにより、ルグランスキのいう内生的帰属を促進させ、エンハンシング効果を高め、主体的な学習を支援することが本稿の目的である。

4. 内発的動機づけと自己評価

学生にとって成績評価は重大な関心事である。一般的に、学生はよい成績評価を得たいと願う。この動機を内的動機づけに転化させ、主体的な学習支援につなげる手続きを述べる。

まず、学生が内発的動機づけにおける「内生的－外生的帰属説」の考え方を認識することが大切である。「行為」「手段」「目的」の中で、内生的帰属説は、ある「行為」とその行為自体が「目的」で一致すれば、正の感情が生じ、後の内発的動機づけを高めると考える。その結果、エンハンシング効果が得られる。一方、外生的帰属説は、ある「行為」を目的達成のための「手段」と捉えるため、負の感情が生じ、後の内発的動機づけを低めると考える。その結果、アンダーマイニング効果が得られる。

では、学習活動において、エンハンシング効果を起こすにはどのように考えればよいか。教師が提示した成績評価をよくするための具体的な学習行為（例、指定された参考文献を読み、レポートを書く）を評価をよくするための「手段」と捉えるのではなく、その学習行為自体が「目的」と捉えるように認識を変える指導をする必要がある。

また、学習行為の解釈の抽象度をあげると、次のようにも言及できる。その学習行為によって、自分が学びたい学問体系に占める位置づけを示すこと、その学習行為によって、どんなことがわかるようになるのか、学習の方向性が見えるように指導することも重要である。

次に、学生が自分の学習過程を自己評価し、成績の予測可能性を高める環境を提供することが大切である。自己評価の中で、内的動機づけを高めるような項目を含める必要がある。学生が学習過程を自己評価するには、教員は成績評価に関する具体的な評価項目と基準、過程を学生に示す必要がある。なお、授業における具体的な自己評価内容は次章に示す。

ここで、自己評価の定義を述べる。日本教育工学会（2000）によると、自己評価とは、「自らの行為とその成果などについて振り返り、次の思考や行為に生かしていく一連の思考過程」と記している。「把握（とらえる）→判断（意味づける）→活用（生かす）→把握（とらえる）・・・」というダイナミックな思考サイクルである。自己評価をするには、「判断基準」（自己評価する本人に願いが存在し、その願いを具体化した目標を意識できること）と「メタ認知能力」（自分の能力や性質に関する知識、課題に関する知識、学習方略に関する知識）が必要とある。

5. 自己評価による学習把握シート

第4章に述べたことを、個別の授業で具体化する。

5.1 授業の手順

授業の初めに、内発的動機づけの考え方を提示する。また、コースのカリキュラムに占めるその授業の位置づけも示す。

次に、各学生の希望する成績評価を示させる。成績評価の具体的な評価項目と基準、過程を学生に示し、どのようにすれば、自分の希望する成績に達するのか、理解してもらう。これは、自己評価の「判断基準」に該当する。つまり、自己評価する本人に、授業での成績評価に対する願いが存在し、その願いを具体化した目標を意識させている。

また、学習活動面の自己評価の中で、現状を把握した結果、次にどうしたらよいか、という項目を含めている。これは自己評価の「把握（とらえる）→判断（意味づける）→活用（生かす）」というサイクル思考を生かすためである。この項目は、学習行為自体が目的であることを認識させることにつながる項目でもある。

成績評価の評価項目と基準は以下の通りである。評価項目は「学習活動面の自己評価」「内容理解面の自己評価」「テスト・レポートの評価」の3つである。この3つの評価項目の評価比重は同等に扱う。成績の評価基準は、大学の規程に従う。（100点満点であれば、80点以上は「優」、70－79点は「良」、60－69点は「可」、59点以下は「不可」とする。）提案している成績評価では、自己評価が総合評価の3分の2を占めており、学生の主体的な学習の結果が成績に反映される。

毎回の授業の冒頭で、教員は今回の授業のポイントを提示する。また、毎回の授業の終わりに、授業のポイントを確認し、次回の授業内容の予告をする。毎回の授業の終わりに、学生は自己評価をシートに記入する。

5.2 自己評価の内容

自己評価の内容を以下に示す。自己評価シートは2種類あり、1つは学習活動面、もう1つは内容理解面である。まず、学習活動面の自己評価シートの評価項目を示す。

「学習活動面の自己評価」

(1) 授業内の学習活動

- 1) 授業開始から10分以上遅刻をしなかった。
- 2) 授業に集中した。（私語、いねむり、内職、メールを打つなどをしなかった。）
- 3) 発表・討論・共同作業に積極的に参加した。（質問・意見などの発言をした。）
- 4) 自分で問題意識をもち、考えようとした。
- 5) 今回の授業で、前回までの授業内容、次回への授業へのつながりがみえた。

(2) 授業外の学習活動

- 1) 授業の予習をした。（30分以上、または、教科書10ページ以上読むなど）
- 2) 授業の復習をした。（30分以上、または、ノート・教科書を読み直す、前回の授業で理解できなかったことを理解した、など）

3) 参考文献などを読んだ。(30分以上、または、10ページ以上)

4) 前回の授業で、自分の立てた目標を実行した。(具体的な学習活動を記す。)

(3) 次回までの学習目標

今日の授業の自己評価を通して、次回の授業までに、あなたは何をしますか。(具体的な学習活動を記す。)

これらの項目をチェックした後、点数化する。

次に、内容理解面の自己評価シートの評価内容を示す。

「内容理解面の自己評価」

毎回の授業のポイントを記述し、小テストをする。採点は採点基準を提示し、他の学生に採点させ、本人が確認をする。

5.3 自己評価シートの工夫

学習活動面、および、内容理解面の自己評価の結果は、毎時、点数化しておく。評価シートに、獲得した点数を時系列に折れ線グラフ化し、個人の学習状況の変化を視覚的に伝える。たとえば、授業の5回目まで、10回目まで、最終時までの各学習項目の点数をレーダーチャートで表示し、現在の学習活動を視覚的に伝えることも可能である。また、クラス全体の平均点、最高点、最低点などを適宜伝えることにより、クラス全体にしめる個人の位置づけも明確になる。

評価シートは紙面だけでなく、ウェブページも利用したい。自己評価のページに、入力した点数の自動集計、自動グラフ化する機能を付加できれば、各人の学習状況を自動的にグラフ化することやクラス全体の評価の傾向も簡単に表示できる。

6. 予想される結果とまとめ

今後、授業で自己評価シートを使い、授業実践する予定である。この方法は、成績評価にしめる自己評価の割合が3分の2と大きく、成績評価の過程の透明性が高い。そのため、学生が主体的に学習に取り組むものと予想している。一方で、他の授業に比べ、学生が主体的に学習しなければ、成績はとれないことになるだろう。

本稿では、フレキシブル・ラーニングの点から、学生の主体的学習を支援する方法として、学生がもっとも関心をもつ成績評価に着目した。学生の成績評価に対する動機付けを高めることで、主体的学習を支援することを目的とし、成績評価を内発的動機づけと捉え、自己評価を試みる。具体的には、毎時の授業終了時に、学生が自己評価による学習把握シートを記入し、成績評価をフィードバックすることにより、学習状況を把握し、次に何を学習すべきかを考えさせるといった主体的学習を支援する。

参考文献

浅野誠 (2002) 「授業のワザ一挙公開-大学生き残りを突破する授業づくり-」, 大月書店
日本教育工学会編 (2000) 「教育工学事典」, 実教出版

松下佳代（2002）「学生消費者主義と大学授業研究－学習活動の分析を通して－」，京都大学高等教育研究第8号，pp.19-38.

宮本美沙子，奈須正裕編（1995）「達成動機の理論と展開 続・達成動機の心理学」，金子書房

D.W. ジョンソン他、関田一彦監訳（2001）「学生参加型の大学授業－協同学習への実践ガイド－」，玉川大学出版部

参考資料

伊藤秀子（2003）「メディアFDとフレキシブル・ラーニング支援の研究開発」，平成15年度メディア教育開発センター共同研究「学習評価支援」フォーカス・グループ 第1回会議 配布資料